

幼児教育に携わる人のための0歳期の言語生活の発達とその目安 —野地潤家博士の『幼児期の言語生活の実態』Iを 手がかりにして— (その1)

前田 眞 澄

九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2018年11月1日受付 2018年12月5日受理)

要 旨

野地潤家著『幼児期の言語生活の実態』I (昭和52<1977>年、文化評論出版)を取り上げて、誕生から9か月目までの一乳幼児の言語生活の発達を明らかにしようとしたものである。本書には、対話が場面本位に記録してある。それに基づいて、ひとりの人間としての全体性を失わないようにして、幼児の主体的に取り組む活動に着目して帰納的に発達する姿を明らかにし、その意味を探り、保育者が活用する目安を示そうとしている。この時期は、泣くことですべての感情を表す段階から、表面的には現れにくい聞くこと・見ることが単発的にも、相乗的にも積み重ねられて発達の足場となり、手足・体を動かすこと、笑うこと、声を出すこと、舌・唇を動かして口形練習をする段階に進む。他方声を上げずに遊ぶことで以後ことばにしうる経験を蓄えることも行われている時期だと言えよう。

はじめに—本研究の目的・方法、資料—

22年間「ことばの指導法」(免許法上の科目としては、「保育内容 言葉」)を担当してきたが、毎年半期の授業1科目があるだけであり、その前半が幼児の言語発達、後半が幼児期のことばの指導ということで、おおよその見通しをつけていた。そして、授業の要を附属幼稚園の参観、県立図書館司書の読み聞かせの実演、実地指導講師3人の講話におき、済ませていることが多かった。ところが、言語発達の見通しを付けるために、半ばの授業を費やすことは不可能であり、どうしてもことばの指導に力点を置いた授業を作り上げていくほかなくなかった。その時、どうしても必要な幼児期の言語生活の発達を、具体的な場面で継続的に追って研究したものが不可欠である。本稿では、それに最適な資料として、野地潤家博士の『幼児期の言語生活の実態』I—IV (昭和48<1973>年—昭和52<1977>年、文化評論出版)を取り上げたい。0歳期の言語生活の発達を帰納的に引き出した上で、その発達の意味を明らかにし、保育への活用を示すことが目的である。方法としては、対象となる乳幼児の泣く、聞く、見る、体を動かす、声を出すなどの行為に着目して、事例を時系列順に挙げ、そこにどういう進展が見られるかを探っていくようにする。ただし、本稿では、誕生から九か月目までの考察にとどまっている。なお、引用ページは見やすいように本文中に入れること

にする。

一 泣くことによって、感情表現の第一歩を踏み出す (最初の一か月)

- ① 昭和23〈1948〉年3月9日午後9時55分…「初声がきこえ」「産婆さんがよく洗って、用意してあった赤い着物をきせて、よだれかけもかけて、ねかせてくれる。」(『幼児期の言語生活の実態』I、昭和52〈1977〉年12月1日発行、文化評論出版、p1。以下、同じページの引用が続く時には、ページを略す。)

(考察) 初声も泣くことの最初と見れば、産婆さんのその後の行動は、赤ちゃんの泣き声に応えたものとみることが出来る。

- ② 二日後の昭和23〈1948〉年3月11日…「すこし泣くようになったので、祖母に手伝ってもらいながら、お乳をのませる。母は横臥したままなので、なかなかのませにくい。」とある。また、同日午後3時ころ、産婆さんが来て、「湯に入れてもらう時、まっ赤になって泣いた。産婆さんは、おなかがすいたのだろうと言う。」という場面もある。

(考察) いずれも泣くと、周りの人が必ず反応を返したり、その意図を察したりしている。

- ③ 昭和23〈1948〉年3月18日…夜「よく泣いて、母は夜通しねむることができないほどであった。」(I、p2)

昭和23〈1948〉年3月21日…「顔の皮がむけはじめた。おむつがぬれると、すぐに泣きだしてしまう。」(I、p3)

昭和23〈1948〉年3月22日…「朝から、一時間半くらいごとに、目をさまして泣く。泣くのをそのままにしていたら、しゃくりあげて泣いていた。母、まけてお乳をのませる。」

昭和23〈1948〉年3月24日…「昼間、二時間おきくらいに、お乳をのませる。泣くにつれ、母もいっしょに泣きだしてしまう。」

(考察) 泣くことがこれから本格化していく兆しを見せている。以下も、当然のことながら、泣くという例は続出する。

ところが、次のような例も出てくる。

昭和23〈1948〉年4月1日…「人の気配がわかるらしく、そばへいくと、泣きやめる時がある。」(I、p4)

(考察) 人間の赤ちゃんは、生まれて間もない時から、人を意識して泣くのであり、近くに来てもらって嬉しいというようなことがあると、逆に泣き止むということも出てくるようである。

- ④ その一方で、まだ生まれて一か月にもならないのに、以下の記録がなされている。

昭和23〈1948〉年3月21日…「(澄晴→物音のほうへ)」とあり、「耳がすこしきこえるようになったらしい。物音を感じて、頭を向け、見えるように目をみはっている。」(I、

p3)

昭和23〈1948〉年4月8日…「おむつをたたんでいる母のほうを、見ている。母が食事に立つと、その方向に、目を動かしている。」(I、p6)

(考察)前者は、物音がしたと感じて、耳でとらえようとする動作から始まり、目は見えるのかどうかかわからないが、目でも確かめようとして「目をみはっている。」というのであろう。それに対して、後者は、音がしない母の所作についても「目を動かしている」ということであらう。耳も目も働き始めており、その際には、泣いてはおれず、自ずと聞くこと・見ることに集中する兆候が出始めている。

二 口内において口を動かす練習を始める(二か月目)

① 泣くことは、二か月目になっても、中心的位置を占める。そうすると、どんな生活になるかを端的に示しているのが、昭和23〈1948〉年4月11日の次の記述である。

「泣けば父だっこ—あやす—泣く—母、おむつを見て、お乳をのませる—ねむる—ねかせる—すこしねむる—泣く—また、父だく。一日中、これをくりかえしている。」(I、p7-8)

(考察)泣くことは、生まれたばかりの乳児ができる唯一の感情表現である。泣くと言っても、叫びに近いものであろう。しかも、この最初の感情表現で全てを表すのである。そうであればあるだけそれを聞いた父や母は何が言いたいのかを手探りで推測するしかなく、一日中だっこした方がいいのか、おむつを替える方がいいのか、お乳をのませる方がいいのかと、試行錯誤せざるを得ないのである。

② 他方、聞くことの例と思われるのは、昭和23〈1948〉年4月30日の次の一例しかない。

「母が歌をうたってやると、お乳をのむのをやめて、じっとしていたり、また、泣きだしたりする。」(I、p11)

(考察)母の歌を聞いて、じっと受けとめている間なのであろう。ただし、聞くことに飽きれば、もういやだと感じて、いつでも泣くことに戻るわけである。

③ 見ることは、以下の2例にあるように、口をもぐもぐさせることとともに出てくる。

昭和23〈1948〉年4月23日…「入浴後、母が乳をのませ、祖母がだくと、おとなしく目をあけている。(中略)電燈をよく見えるところにおいてやると、大きな目をあけて、いっしょうけんめいながめている。ときどき、口をもぐもぐさせている。」(I、p10)

昭和23〈1948〉年4月26日…「入浴後、二時間くらい、おとなしくしている。電燈を見つめ、また、口をもぐもぐさせている。」

他方で、見ることだけが独立して出てくることもある。

昭和23〈1948〉年4月28日…「つるした風車をよく見ている。」(I、p11)

(考察)見ることと口をもぐもぐさせることの間を直結させる必要はないのかもしれない。

後の⑤には「わらう」や「語る」が出てくるが、「口をもぐもぐさせる」はそのさきがけをなすのかもしれない。

※昭和23〈1948〉年5月3日…「ときどき、わらう。つるされた風車を、みつめている。」は、見ることが確かに笑うことに結びついた例である。ただし、「わらう」は、対象が人に限られない。この場面のように、風車が相手になるばあいもあるわけである。

④ なお、手を動かすことも、下記のように報告されている。

昭和23〈1948〉年4月24日…「入浴後、手を動かしている。」(I, p10)

昭和23〈1948〉年4月25日…「朝、よく手を動かせるので、着物をぬがせ、手を出してやったら、上のほうへのぼして、気持ちよさそうにしていた。」

(考察) 耳や目を働かせるより少し後になるのかもしれないが、手を動かしたり、伸ばしたりすることも始まっている。これが、三か月目、四か月目となると、みるみるうちに活発になっていく。そのきっかけが、ここに記されている。

⑤ ①、③、④の後に、「わらう」と「語る」が、次のように出てくる。

昭和23〈1948〉年4月27日…「朝、あやしたら、二度ほど、わらう。」(I, p11)

昭和23〈1948〉年4月28日…「母があやしていると、口の中で、なにか言っているように、『ウクン』『フン』とか言うように、語りは始める。口をいろいろの形にうごかしている。」(考察) 「わらう」と「語る」とは、違って見えるが、上記の例では、いずれも母があやしたことへの反応ということでは共通しており、主に口で表すものという点でも一致している。源は近いかもしれない。次の事例などは、よけいにそう思わせられる。

昭和23〈1948〉年5月8日…「きげんのいい時には、(母に)よくわらったり、かたったりする。」(I, p13)

ただし、4月28日の例が、どこまで語ったと言えるものであったかについては、後の事例と照らし合わせないと、はっきりしたことは言えない。ここで語ったとしても、何を語ったのかと問い直すと答えられなくなるからである。上述の書きぶりでは、口頭練習を母親にみてもらい、何とか答えようとしているんだよということをわかってもらおうとしているというのが、事実に近いかもしれない。

三 声を出して笑う (三か月目)

① 三か月目になっても泣くことは続くが、記述されているところは幾分減ってくる。しかし、涙がたくさん出たり、泣き声が大きくなったり、激しく泣いたりするようになっている。以下のような経過をたどっている。

昭和23〈1948〉年5月12日…「夕方、泣いて泣いてこまる。どうしてもねむらない。」(I, p14)

昭和23〈1948〉年5月20日…「母が洗濯している間、しばらく泣かせていたら、涙

がたくさん出ていた。もうりっぱに涙が出るようになった一と、母が感心する。」(I、p16)

昭和23〈1948〉年5月31日…「朝、便通の時、すこし泣かせたら、怒ってしまって、しばらくお乳ものまないで、せきあげていた。そのあと、小川のおじさん、父があやしても、すこしもわらわない。」(I、p18)

昭和23〈1948〉年6月1日…「夜、どうしてもねむらない。一時間半か二時間おきに、目をさまして、火がつくように泣く。泣く声も大きくなった。きげんもとりにくい。」

昭和23〈1948〉年6月2日…「父にだっこして、ミルクをのんでいる時、急にすごく怒って、泣く。つよく泣く、お乳ものまないで泣く。」

(考察) 三月目に入り、涙もいっぱい出せるようになり、個性も現れ始めて、泣き方も激しくなってきたようである。5月31日の記述のように、周りの大人の対応によって怒って泣くことなどもあり、いくら幼くても人間としての泣き方なのだと感じられる時期になっている。

② 聞くことの具体的な場面は挙がっていない。周りの人があやしたり、声をかけたりする中で、笑い、語るところに入っているのであろう。見ることが歴然とわかるのは、次の2例である。

昭和23〈1948〉年5月24日…「雨の中を、宇品へ上陸する。小川さんが迎えにきてくださる。澄晴(すみはれ)、小川さんを見かけて、二度ほほえみかける。」(I、p16)

昭和23〈1948〉年5月27日…「夕方、ミルクをよくのむ。その後、とてもきげんがよく、夕焼(け)の空をじっと見つめていた。夜、おとなしくねむる。」(I、p17)

(考察) 前者は、見え始めた乳児にも、よく知った人の顔が見えるのは嬉しく、自ずとほほえみかけることまでしたようである。見るという行動は、認識に深くかわり、次の行為にもつながりやすい。しかし、後者のように、内に蓄積するばあいがもっと多いのであろう。

③ 声を発することは、頭や手足を動かすことと強く結びついているようで、そこに至るまでの過程を抜き出すと、下記のようなになる。

(ア) 昭和23〈1948〉年5月9日…「淵本のおばさんがあやすと、よくわらったり、かたったりする。」(I、p14)

(イ) 昭和23〈1948〉年5月17日…「朝、きげんがよい。父があやすと、よくわらう。」(I、p15) (対話場面が先に掲げられ、文番号がついてあるが、省略している。)

(ウ) 昭和23〈1948〉年5月27日…「○キャー。(澄晴→母)

昼すぎ、このように声をたててわらった。頭を動かし、手を動かし、はじめてほんとうにうれしそうにわらった。」(I、p17)

(エ) 昭和23〈1948〉年5月30日…「目立って手足をよく動かすようになった。目の覚めた時はきげんがよい。からだをしきりに動かし、枕をはずしたりする。」(I、

p18)

(オ) 昭和23〈1948〉年5月31日…「(母に向かって) わらう時、からだも手足もいっしょうけんめいに動かす。おこる時も、そうする。」

(カ) 同日、「くすだまの近くにつれていくと、口をあける。また、手をその近くへやって、しきりに動かせる。」

(キ) 昭和23〈1948〉年6月2日…「きげんのいい時、父が『オツカイワ ジテンシャデ……。』のようにうたってやると、よくわらう。」(原文是对話場面と解説のようにわけてあるが、わかりやすいように引用者の方でまとめている。以下も同様である。)

(ク) 昭和23〈1948〉年6月4日…「朝は上機嫌で、小川のおじさんにだっこしてもらい、わらったり、かたったりしている。」(I、p19)

(考察) 最も注目されるのは、(ウ) の声を出せた事例である。声を出して笑うことはたいへんなことのように、頭を動かし、手を動かさないとともに出しにくいことらしい。すでに笑うことが何度もあり、体全体で喜びを表現する際に、声も伴ったのであろう。体を動かすことの一環として、ほかの動きとうまくかみあったとき、声もやっと思えたようである。以後、(エ) から (ク) まで声をたてることは、一度も出てきていないのである。

四 寝返りをして声を発する源となる経験をする (四か月目)

① 生まれて三月経ち、母が「動作がはつきりしてくるし、くびもよくすわってくるし、とても元気になった」と記しているという。泣くことへの記述も、ずいぶん減ってくる。以下の4例が全てである。

昭和23〈1948〉年6月14日…「朝、母が留守の間、よく泣く。父おもりをする。母、(帰って) お乳をふくませても、なおしゃくりあげている。」(I、p21)

昭和23〈1948〉年6月17日…「夕方がくると、泣きだす。夜、なかなかねむらない。十一時すぎて、やっと思むる。」(I、p22)

昭和23〈1948〉年7月3日…「午後三時半ころから、四時半ころまでねむる。目がさめた時、父、あやすけれども、泣いてやめない。」(I、p26)

昭和23〈1948〉年7月5日…「夜、むしあつく、なかなかねむらない。ねついたらと思うと、今までにない大きな声で、手足を動かし、頭をふって、泣く。母おどろいて、おむつをしらべる。とたんに、しっこをする。」(I、p27)

(考察) 時に泣くことはあっても、さまざまな活動の一翼を担う状態になってきているようである。

② 見るのは、次の四項目である。

昭和23〈1948〉年6月23日…「(父が求めてきた) 風鈴が好きで、ひとりでながめたり、

うれしがったりしている。」(I、p23)

昭和23〈1948〉年6月30日…「小川さんからもらった蝶々つきの風鈴を、蚊帳の中につけてやると、おとなしく見つめている。」(I、p25)

昭和23〈1948〉年7月6日…「朝、父、澄晴をだいて、近くの蓮池までいき、蓮の花を見る。昨夜の(むし暑くて眠れなかった)つかれか、きょうはよくねむる。」(I、p27)

昭和23〈1948〉年7月7日…「帰宅した父を見ると、にっこりとわらう。」

(考察) 聞くことは取り立てて記されていないが、風鈴の音を聞いたり、父の言葉を耳にしたりしていよう。見るだけ、聞くだけに見えても、にっこり笑うなどの反応も、時には出せるようになっていく。しかし、この四か月目で主導的な役割を果たすのは、体・手足の動きである。

③ 左記のように、あふれるほど現れてくる。

(ア) 昭和23〈1948〉年6月14日…「今まで片方ずつ、ひろげたり、かがめたりしていた手を、両方あわせることができるようになった。」(I、p21)

(イ) 昭和23〈1948〉年6月21日…「よだれかけを手でひっばるので、はずしておく。すると、着物のひもをひっばって、ほどいてしまう。」(I、p23)

(ウ) 昭和23〈1948〉年6月22日…「朝、シッカロールの箱が気に入ったらしい。父の腹の上におすわりして、シッカロールの箱の上に手をおいて、しきりに指を動かしている。にぎろうとするかのようである。一心に、箱を見つめている。」

(エ) 同日…「日に日に動作がはっきりしてくるようである。(中略)

藤原与一先生(父の先生)、近くの小川さんかたにおみえになる。はじめは、先生にだかれて、泣いていたが、しばらくして、すこしずつほおえむ。おしまいには、からだをのりだすようにして、『ウ ウ……。』のように、先生に語りかけた。小川のおじさんも、父も、おどろく。」

(オ) 昭和23〈1948〉年6月24日…「昼すぎ、風鈴の下にねかせ、おむつ一枚を洗いにいき、ほしている時、なんだかへんな声がある。母がふと見ると、澄晴は寝がえりをして、いっしょうけんめいに頭をもたげていた。母、びっくりして、おこしてやる。顔中、よだれか、つばきのようなものがついてた。なんだか、うれしそうにしている。すこしも苦しい様子は見えなかった。

寝かせると、しきりに横向きになって、寝がえりをするように、反動をつけている。」(I、p24)

(カ) 昭和23〈1948〉年6月28日…「寝かせていても、すぐに枕をはずしてしまい、横向きになって、寝がえりをしそうにする。うまくできないと、怒り出す。すこし足をたすけてやると、寝がえりができる。うつむきにしてやると、とてもうれしそうに大きな目をして、まわりを見つめる。二回ばかり、寝がえりをする。(中略)

- 寝がえりをして、うつむきになっている時、父が下のほうからのぞきこむようにして、『バー。スミハレチャン バー。』の文を言ってやると、にっこりわらっている。」
- (キ) 昭和23〈1948〉年6月29日…「父、からだぐあいわるく、澄晴といっしょに寝ている。父がうちわを上の方からだんだん下にさげていくと、しだいに手足を動かし、手を上のほうにやって、うちわをとろうとする。顔の近くにくると、いきなりうちわをだきこんで、なめようとする。なんかいもくりかえしてする。」(I、p25)
- (ク) 昭和23〈1948〉年6月30日…「(母が)寝かせようとする時、お乳をひっぱりながら、(母に)『ウン ウン……。』のように言って、怒りだす。さんざんおこりながら、寝てしまった。」
- (ケ) 昭和23〈1948〉年7月2日…「(誰に言うともなく)感嘆詞的にさけぶ『アッ。』というのが、たいへん力づよく、また、高くなってきた。また、つづけさまによくかたうようになった。」
- (コ) 同日…「『タカタカ』(両手で高くささげてやること)をしてもらおうと、声をたててわらう。おろしても、また、持ちあげられる準備のしぐさをして、うれしがる。」
- (サ) 同日…「蚊帳の中にはいつている時、蚊帳の天井に近くうちわをあげ、だんだん顔に近づけてやると、緑まじりの赤い模様を目をつけ、あおむけに寝ていながら、おどりががるようにして、両手をひろげ、ひとみをかがやせて、つかもうとする。かわいいしぐさである。そして、両手で自分の顔をおおうようにとらえてしまうと、すぐになめようとして口に持っていきこうとする。」(I、p25-26)
- (シ) 昭和23〈1948〉年7月3日…「朝食後、おんぶして、母、洗濯する。雨ふりはじめる。母におんぶしたまま、雨だれにあたって、おどろく。」(I、p26)
- (ス) 昭和23〈1948〉年7月4日…「朝から、きげんがよい。父がふとんの中で本を読んでいると、そのそばから、『ウン ウン。』のように言って、さかんに手を動かし、目をみはって、父の読んでいる本をながめる。また、父が新聞を読んでいる時も、『ウン ウン。』と言って、ひとりで語っている。」
- (セ) 同日…「寝がえり、すこし手伝ってやると、できる。二回した。
(中略)寝がえりをした時、頭をもたげ、大きい目をみはり、うれしそうにまわりを見つめる。父があやすと、わらう。」
- (ソ) 同日…「風車の近くへつれていくと、目を見はり、両手を動かして、とらえようとする。」
- (タ) 昭和23〈1948〉年7月8日…「母が『婦人の友』を読んでいる時、『ウン ウン。』と言って、ふしぎそうにその雑誌を見ている。」(I、p27)
- (考察) 16例と多岐にわたるが、大筋としては、手指の動きにつれて足も動くようになり、寝がえりをするような、全身の動きになっていく。それに伴って、少し遅れるようにして声

が発せられるようになるという進展になろう。

分析的に言えば、初めの(ア)から(エ)までの寝がえりをする以前の発達、(オ)・(カ)という寝がえりをするがまだ声は伴わない段階、(キ)－(タ)という声が出やすくなり行動もどんだんなされて口唇期に近づく段階の三つに区分されよう。

(ア)で、それまで片方ずつ広げたり握ったりしていたのを、両方合わせることができ始め、(イ)・(ウ)になると、手全体でひっぱったり、一心に対象を見据えて指を動かしてにぎろうとしたりする。(エ)の相手に慣れると、「からだをのりだすようにして」話しかけるのは、手と足がうまく組み合わさって、おまけに声を発することまでできたためであろう。前月5月27日と同じように、体の動きが順調に進んで、ここでもやっと声が出始めているのである。

その上に、(オ)6月24日・(カ)6月28日の寝がえりの報告が登場する。『幼児期の言語生活の実態』Iによれば、(オ)が初めてのうまくいった寝がえり、(カ)はうまくいかなくて父に助けられて二回ほどできた寝がえりである。初めての寝がえりは、偶然うまくいったのだろうか。「なんだか、うれしそうにしている。すこしも苦しい様子は見えなかった。」とある。ところが、数日経っても、「横向きになって、寝がえりをしそうにする」が、できず、「怒り出す。」そこで「すこし足をたすけてやると」やっと「寝がえりができ」たのである。当然、喜びもひとしおのはずだが、「うつむきにして」もらっても、「とてもうれしそうに大きな目をして、まわりを見つめる」のにとどまる。父がさらに「下のほうからのぞきこむようにして、『バー。スマハレチャン バー。』と声をかけても、にっこり笑うことしかできない。一番言いたいことがあるはずの日でも、すぐに声は出ないようである。この時点では、嬉しそうな表情で現すか、達成感をにっこり笑うことでしか示せなかったようである。あまりに大きな感情体験だけに、どう表出してよいかわからなかったのかもしれない。

しかし、その後、(キ)うちわをとって、なめようとする、(サ)うちわをおどりあがるようにしてとろうとする、(ソ)風車の近くでは、目を見はり、両手を動かしてとろうとするなど、行動がいよいよ積極的になる。(ク)寝かせようとした母に、お乳をひっぱりながら、「ウンウン。」のように言って、怒り出す。(ケ)力づく、高く、「アッ。」と叫ぶ。(ス)父の読んでいる本を眺めたり、読んでいる新聞を眺めたりして、声を出す。(タ)母が読んでいる雑誌を見ながら声を発するなど、次々に声をあげているのである。(シ)の「雨だれにあたって、おどろく。」というの、声にまではならなくても、感情表現には違いあるまい。(セ)にあるように、寝がえりの表現はなお今一步のところがあるが、それ以外では、いくつも声に出せるようになってきたのである。寝がえりの経験は、長い目で見れば、声を発する源を耕したことになりそうである。

五 見たこと・聞いたことと行動・発声とを連続的に繰り広げる(五か月目、六か月目)

① 泣くことも感情表現の一つとして用いられるようになる。下記のとおりである。

昭和23〈1948〉年7月9日…「午後十時ごろ、ねむくなっているのに、行水をさせる。生まれてはじめてのはげしきで泣く。」(I、p29)

昭和23〈1948〉年9月5日…「午前七時ころ、大洲の祖母のうちを出て、卯之町の松林眼科医院へいく。入院中の祖母を見舞うためである。途中、八幡浜駅で、はげしく泣いてこまった。キャンデーをたべさせなかったのだ。」(I、p36)

昭和23〈1948〉年9月7日…「大洲の祖母のうち。朝、寝がえりをする時、はげしく泣く。右の目、目やにが出て、目をまぶしそうにして、きげんよくない。」

昭和23〈1948〉年9月8日…「澄晴の目を見てもらうため、父・母、澄晴をつれて、松山へ出る。榎町の菅井眼科へいく。はげしく泣く。」

(考察)いずれも、周りにいる親から見れば、泣く理由が突き止められるものである。いずれも、もったもな泣き方なのである。

② 見ることが明記されているのは、以下の三例である。

昭和23〈1948〉年7月10日…「平井の祖母のうちへ帰るため、母、おんぶして、紙屋町(広島市内)まで歩く。その間、ねむる。宇品への電車の中で、目をさまし、赤い文字で書かれた広告を見つめる。」(I、p29)

昭和23〈1948〉年8月22日…「朝、父、澄晴をつれて、近くの蓮池にいく。蓮の花を見せる。」(I、p34)

昭和23〈1948〉年8月30日…「母と澄晴、平井の祖母のうちへ帰る。父、母子を宇品港まで見送る。八時の船で帰る。澄晴、まぶしそうにしている。」(I、p35)

ただし、父も母もさまざまな機会をとらえて見たり聞いたりさせたいと願っているようで、下記のことは、見たり聞いたりする絶好の機会にもなったことであろう。

昭和23〈1948〉年8月24日…「夜、父、澄晴をつれて、近くの小川さん宅へいく。」

昭和23〈1948〉年9月2日…「大洲の祖母、失明のため、母、澄晴をつれて、平井から大洲へ帰る。」

昭和23〈1948〉年9月5日…「入院中の祖母と、いっしょに寝たり、祖母の両手を持って遊んだりする。祖母、うれしがる。」(I、p36)

昭和23〈1948〉年9月6日…「きょうは祖父の命日である。午後、父、母、澄晴をつれて、祖父の墓まいりにいく。その途中、父澄晴を肩車にのせる。」

聞くこと単独での場は挙がっていない。

③ 行動が活発さを増していくにつれて、三月目から出始めた声が出ることは、五、六月目もゆるやかに進んでいく。語ったり、喜んで活発に動いたり、泣きそうな場面であっても泣かなかつたりする一方で、あやしても時により人によってわらわなかつたり、そっぽを向いたりするなど、対応が多様になってくる。前者では、次のような事例が報告されている。

- (ア) 昭和23〈1948〉年7月9日…「朝、父が新聞を読んでいると、そばから、『ウン ウン。』のように言って、語るようにする。」(I、p29)
- (イ) 昭和23〈1948〉年7月10日…「船の中では、ねむっていたが、音戸港につく時の汽笛の音で目をさます。隣にいる人(船客)に、話しかけるように、『ウン ウン ……。』と言い、わらっている。
- (ウ) 昭和23〈1948〉年7月14日…「午後四時の汽車で、父・母、澄晴をつれて、大洲へ向かう。車中は、かなり混雑していたが、すこしも泣かない。」(I、p30)
- (エ) 同日…「大洲の祖母のうちへ向かって、山道をのぼっていく途上、クミコおばさんが迎えに来て、だっこしてもらおう。おばさんに向かって、よく語る。」
- (オ) 昭和23〈1948〉年7月15日…「大洲の祖母のうち。クミコおばさんに、おもちゃを二つ買ってもらう。赤いおもちゃをもらおうと、すぐに口のところへもっていく。」(I、p31)
- (カ) 昭和23〈1948〉年8月30日…「平井の祖母のうち。夕方、入浴させる時、うれしそうに手をふって、ばちやばちやさせる。」(I、p35)
他方、同じ日であっても、このような行動も、見られる。
- (キ) 昭和23〈1948〉年7月10日…「高浜駅のホームで、母におんぶされているのを、『シミハレチャン。』の文のように言ってあやすと、急に反対向きになって、顔をそむける。船の中で、お乳をのんだが、すこし足りなくて、ふきげんになっていたのである。」(I、p29)
- (ク) 昭和23〈1948〉年7月11日…「平井の祖母のうち。平井の祖母やおばさんがあやしても、あまりわらわない。」(I、p30)
- (ケ) 昭和23〈1948〉年7月18日…「大洲の祖母のうち。夕方、母におんぶしている時、クミコおばさんがあやしても、わらわない。あやしていると、反対のほうに、そっぽを向いたりする。」(I、p32)
- (考察) それぞれの反応のよって来るところを考えれば、いずれも見たり聞いたりしたことが、元になっている。

(ア) では、父が新聞を読んでいるのを見て何か言いたくなっただけであろうし、(イ) では汽笛の音を聞いて、一番近くにいる人に、大きな音だったねとでも言おうとしたのだろうか。(ウ) は、汽車の車中で多くの人が話したり、笑ったりしているところを、目にもし、耳にもして、混雑しているが、泣くまいとしているところであろう。(エ) は、クミコおばさんがわざわざ山道まで迎えに来てくれたのを見、話すのも聞いて、喜んで語ろうとした場面になるだろうか。だっこもしてくれて、うれしかったことであろう。(オ) も、同じクミコおばさんが赤いおもちゃを二つ買って手渡してくれ、話している雰囲気も察して、安心して口元に持って行ったことであろう。(カ) はみんなに囲まれて、なごやかに話が繰り上げられる

中で、存分に遊んで構わないとわかり、手をふってばちゃばちゃさせたことになろう。

他方、(キ)では、父に優しく呼びかけられたが、おなかが十分くちくちくならず、いい顔はできなかつたことになろう。(ク)・(ケ)も、平井の祖母やお婆さん、大州のクミコお婆さんにあやしてもらっても、調子がよくなかつたのか、あやしかたのどこかが気に入らなかつたのか、ともかく喜べなかつたようである。同じ人に接しても、うれしいときとそうでないときの波がある。赤ちゃんにも、そういうことがあるのであろうか。反応は違つても、聞いたり見たりした様子から、少しずつ個性的対応をし始めているのであろう。

六 はい出し、口形練習をさかんにする(七か月目、八か月目)

① 泣くこと、むずかることは、基本的に少なくなっているのであろう。七か月目、八か月目の二か月間で、記録されているのは以下の四回のみである。

(ア) 昭和23〈1948〉年10月10日…「夕方、めごをひっくりかえし、おちゃわんのすごい音がすると、びっくりして泣く。」(I、p41)

(イ) 昭和23〈1948〉年10月18日…「朝、澄晴がむずかる。」(I、p42)

(ウ) 昭和23〈1948〉年10月20日…「夕方、澄晴、ねむりからさめ、火がついたように泣く。どうしても泣きやまない。」

(エ) 昭和23〈1948〉年10月29日…「午前九時過ぎ、福屋(広島市内、百貨店)へ、近代美術展を見に行く。途中、澄晴泣いてこまる。」(I、p42-43)

(考察) これらのうち、10月10日の(ア)は、おちゃわんの音がひどくて、びっくりして泣いたとある。10月29日の(エ)は、美術作品のどこを見て味わえばよいかわからず、退屈していやになったようである。いずれも突発的で不可抗力なことである。10月20日の(ウ)も、夢でおそろしい目にでも遭つたのだろうか。きげんのよい日が多く、ときに悪くなることもあるという程度のものである。

② 見ること・聞くことがそれだけで取り出せるばあいは少ない。強いてあげれば、次の二例になろう。

昭和23〈1948〉年9月17日…「(父の実家で)母、お月見の用意をする。月、晴れ、虫、澄む。」(I、p38)

昭和23〈1948〉年9月19日…「平井駅から、平井の祖母のうちまで、父、澄晴をだいて帰る。青田の上に、月が美しくのぼっていた。」

(考察) どちらも格別のことをしたわけではあるまい。しかし、このことを記した父の中では、当然お月見をすること、我が子にここで見えてきたもの、聞こえてきたものが心に刻まれればよいがと願っていたことであろう。それが、9月17日のお月見の際の描写によくあらわれていよう。「月、晴れ、虫、澄む。」と期しくも我が子の名前二文字をそれぞれ動詞として用いている。9月19日の「青田の上に、月が美しくのぼっていた。」も、書けそうでなかなか

書けないことである。

③ 題に掲げたように、この時期に目立ってくるのが、動くこと、なかんずくはうことである。時には、つかまり立ちすることもある。その過程を順に記していくと、次のようになる。

(ア) 昭和23〈1948〉年9月19日…「松山への車中、父が書物を読んでいる時、澄晴、ひとみをひからせて、とびついてくる。そして、父の読みかけの本を、手でたたきようにする。」

(イ) 昭和23〈1948〉年9月20日…「平井の祖母のうち。離れの畳の上で、ころがっていた青い蜜柑を目がけて、二三メートル、一心にはう。蜜柑を求めて、ひとりではいはじめたのである。」

(ウ) 昭和23〈1948〉年9月28日…「這う時、ひざをたてて、四つばいになり、からだをゆさぶっている。夜、七時ぐつすりねむる。」(I、p39)

(エ) 昭和23〈1948〉年10月1日…「澄晴、にぎやかによくあそぶ。」

(オ) 昭和23〈1948〉年10月9日…「はいはいじょうずになり、机につかまって、ひとりで立ったりする。」(I、p41)

(カ) 同日…「昼から、ひさしぶりに散髪へつれていく。いそがしく動くので、散髪屋さんこまる。(中略)はさみのほうへ手を出す。また、はさみの音のするほうへ向いて、散髪屋さんをこまらせる。」

(キ) 同日…「夕方の台所で、母におんぶされるのを、ことにいやがる。自由にしたいのである。」

(ク) 昭和23〈1948〉年10月10日…「夕方、台所にきて、お釜をにぎり、手など、すみだらけになる。」

(ケ) 同日…「夕方、めごをひっくりかえし、おちゃわんのすごい音がすると、びっくりして泣く。」(重出)

(コ) 昭和23〈1948〉年10月26日…「澄晴、大いにあそぶ。上ぎげんである。」(I、p42)

(サ) 昭和23〈1948〉年11月7日…「澄晴、動作がすばやくなってきている。」(I、p43)

(考察) (ア) がはい始める直前の動きである。これまでになかった行動で、幼児なりにいらしていることを感じさせる。(イ) には、はい出した瞬間が描き出されている。(ウ) には、はいはいをし始めた幼児のたどたどしくはう様子が感じられる。それが慣れてきたのが(オ)である。ここでは、それがつかまり立ちに直結していることがわかる。(エ)・(カ)・(キ)・(ク)・(ケ)・(コ)・(サ) は、はいはいができることがどれほど次々に積極的な行動を生み出すかが記されている。

- ④ はうことも、すぐに発言に生きてくることはないが、はうことができた余裕が、以下のような発話の場面を作り出すようである。

(ア) 昭和23<1948>年9月28日…「朝の目ざめからじょうきげんで、(人に向けてでなく、)『パー パー。』のようにはっきり言う。また、口の中で、くしゃくしゃたくさん言いつづける。」(I、p39)

(イ) 昭和23<1948>年9月30日…「(自分で)『パ バ パ ファ』の音をくりかえしつつあそんだり、はったりする。しきりにくりかえしている。一つの音をはっきりとらえてきているようにみえる。」

(考察) まだ声を発することは限られている。とはいえ、(ア)のように、誰に言うともなく口形練習が口の中で始まり、(イ)のように、それが外に現れるようになってきたことは、何より重要であろう。振り返ってみれば、すでに生後一か月半の4月23日、4月26日の時点で「口をもぐもぐさせて」おり、4月28日の時点で「口の中でなにか言っているように、『ウクン』『フン』とか言うように、語りはじめ」、「口をいろいろの形に動かしてい」たのである。それがこの時点になると、常態化し、しかも明確な発音にしていくところまで進んできたのである。

七 舌の動き、唇の動きが活発になる(九か月目)

- ① 泣くことを記録されることが稀になる。九か月目では、次の一例だけである。

昭和23<1948>年12月2日…「おむつをとりかえるのがいやで、わんわん泣く。」(I、p45)

(考察) 一歳に満たない乳幼児であっても、本人なりに理由があるのであろう。ただ泣くということは、ほとんどなくなっている。

- ② 見ることは、わずかに次の事例のみである。

昭和23<1948>年12月5日…「父のするあくびを、ふしぎそうに見ている。」(I、p46)

聞くことも、下記の一例のみである。

同日…「紅色のおしろい入れを、父の口元へもってくる。そこで、父が『プッ。』のようになると、けたけたとわらって、うれしがる。『プッ』という声だけで、わらっている。」

(考察) 見ることも今まで着目されなかったことが目にとまるようになり、聞くことも、人の声に関わって聞くのが中心になって来ざるを得ない時期になっているのであろう。

- ③ 遊び、声を出すことは、以下のように出てくる。

(ア) 昭和23<1948>年11月9日…「この日、カードに、『ちょうど八か月で、[カ]の発音ができた。』と記している。どういう場面であったかは、記していない。」(I、p44)

- (イ) 同日…「また、この日、カードに、『かなり、さかんに、いろいろのことを言ってあそんでいる。』と、記している。」
- (ウ) 昭和23〈1948〉年11月20日…「夕食後、よくあそぶ。」
- (エ) 昭和23〈1948〉年11月23日…「きょうは、勤労感謝の日である。この日の夕方から、舌のはたらきがいつそうこまかになり、舌をペロペロと出しながら、ひとりで、なにかをやさしく訴えるように声を出す。」(I、p45)
- (オ) 昭和23〈1948〉年11月25日…「〇ウー ウー。(澄晴→己)
けさは、唇をあわせて、それにつばきを出して、ぶるぶるふるわせながら、それをひとりでよろこんでいる。ひとしきり、興味をおぼえてやっていたが、やがてつばきがなくなると、このように言う。また、つばきがたまと、はじめる。」
- (カ) 昭和23〈1948〉年12月5日…「まだ、ものは言えない。舌の動きがかっぱつになり、下唇の上にまで、舌をペロペロと出すことが自在になってきている。乳母車に入れておくと、すこしはなれている父や母に、意味をなさぬながらに呼びかけようとする。『バイ バイ。』のように言ったり、『ウン ウン。』のように言ったりする。」(I、p46)
- (キ) 同日…「乳母車に乗って、乳母車をゆ(す)るのを好む。」
- (ク) 同日…「蜜柑箱の中に入れてあるかんなくずを、窓の敷居の上につつしては、よろこんでいる。無心に一心にしている。だまって、しきりにうつし、あたりをかんなくずでいっぱいにしてている。」

(考察) (イ) に、「さかんに、いろいろなことを言ってあそぶ」ことに言及されている。基本的には、乳幼児にとっては、いろいろなことを口に出すのも遊びなのであって、だからこそあれだけ飽きることなく続けられるのであろう。単語も確定しないとすれば、これも口形練習に音声が付ったもので、その発展線上に位置づけられるべきものであろう。そうだとすると、(ア) も、いろんな口形をしているうちに、[カ]の音が出たものかもしれない。そうになると、(エ)・(オ)・(カ) も、口形練習の徹底・進展というべきなのであろう。

それに対して、(ウ)・(キ)・(ク) は、言葉の入らない遊びと言えよう。しかし、(ク) のかんなくずを窓の敷居の上に一心に移して喜ぶところには、後にことばにしうるかけがえのないものを内に蓄えているのだと認められよう。言葉の入る遊びと言葉が入る余地のない遊びとが並行して、人としての望ましい成長が促されるのであろう。

それに関連して、昭和23〈1948〉年11月28日に、次のような報告が見られる。

「平井のおじさん(母の兄)、みえる。澄晴、いじらしいくらい、おとなしくしている。」(I、p45)

この記載について言及しているのが、以下のカードの記述である。

「生後九カ月近く、お客さまがみえると、もういつものようにはさわがない。じっとして

いる。人みしりというのではなくて、声をたてない。じっと緊張している。いじらしさをおぼえさせる。」

このような場面を想定してみれば、むしろ場を考えて声を立てないようにするのも、言葉の発達の大切な一過程であると了解されてくる。一歳前にもこのような配慮をすることが可能なことは驚きであり、人間の言葉の成長の精妙さを端的に示すものでもあろう。

おわりに

本稿で幾分錯綜しながらも、誕生から九か月目までの一人の言語生活を追って、発達として推理できる点は、以下のことである。

1 泣くことは、幼児の感情表現の第一歩であるが、初声を除けば、はじめからできるわけではなく、徐々に表せるようになる。現象的には二か月目に全面を覆うように見えるが、三か月目から涙も出るようになり、泣く時には泣き声も大きく、泣き方も激しくなる。四か月目以降は、多くは感情表現の一翼を担う位置づけになり、泣く理由も推察しやすくなるようである。

2 その一方で、聞くこと・見ることも早い時期からこの順に働き始め、目立たないが以後の進展を支えている。五、六か月目になると、以後の行動・発声とつながっていることがわかってくる。

3 泣くことに代わって、手を動かすこと、口を動かし声を出すこと、笑うこと、遊ぶことが出てくる。これらは、わけても相関性が高く、別項目として取り出しにくい。手を動かすことは、二か月目から始まり、続いて笑うことや語ることが出てくる。三か月目になると、目立って手足を動かすようになり、頭も動かして、やっと声を出して笑えるようになっている。四か月目に首もすわり、寝がえりをしても、すぐには表情でしか達成感を表せないものの、その前後から行動がさらに積極的になり、次々に声が出るようになる。五、六か月目もゆるやかな進行が続くが、七か月目にみかんを求めて、ひとりで二、三メートルはい始めそれ以降、一層行動的になる。声をあげる場はまだ限られているが、口形練習が口の中で始まり、それが繰り返されて外に現れるまで常態化し、明確な発音にしていくところまで進んでいる。九か月目になると、舌の動き、唇の動きがなお活発になり、口形練習が徹底されていく。

一方で、言葉の入らない遊びも、並行して無心に行われて、言葉になる前の体験を蓄積しているようである。

身体的存在である人間は、ことば（声）も、首がすわり、寝がえりをする前と後とでは出方が違い、はうことができる前と後とでは見える世界もしうることも言いたいことも変わってくるのだと言えようか。これらは、いずれも誰しも感じていることであろう。

作文教育においては、小学校で子供たちに一番話したいことを思いのままに書き表させると、実際の生活経験を最も忠実に反映した生活文になる。その原経験に遡ると、そこには、

する→見る（聞く）→思う という一連の意識の流れが見いだせる。

(A) する…ここでは、対象にはたらきかける行為すべてをいう。たとえば、「テレビを見る」ことも、「本を読む」ことも、テレビ・本にはたらきかけているのであるから、ここに含まれる。

(B) 見る（聞く）…行為の結果としてあらわれた物事を把握すること。聞く・においをかぐ・舌で味わうなど、五官に知覚されることもすべてこの中に入る。観察記録などでは、この要素が独立してくる。

(C) 思う…見た結果に対して心を動かすこと。①一連の出来事が起こる源にもなり、②する→見る（聞く）と進んで来た時には気持ちの動くことが多く、③また次の行為に向かう動機となる。しかし、ここで一連の経験が完結したなあと感じるような感慨が湧いた時、その思いをこの人に伝えたい、わかってもらいたいという自己表現の欲求を伴って、内部に蓄積される。（拙稿「生活文指導の過程と方法」『昭和62年度研究紀要』第8号、昭和62〈1987〉年9月29日、福岡教育大学・附属中学校、p4を部分的に修正している。）

このような する→見る（聞く）→思うという展開は、幼児の言語生活においては、この時点ではまだ現れにくい。それでも、昭和23〈1948〉年10月10日の事例は、「夕方、めごをひっくりかえ」す（したこと）→その結果「おちゃわんのすごい音がする」（聞いたこと）→「びっくりして」（思ったこと）→「泣く」（二回目のしたこと）のように原経験のいずれの要素も出てくる。どんなに幼くても、人間の能動的な行動には、生活文の原型となるような経験としての連続性が、部分的には出てくるのである。しかし、まだはいはいをし、やつとつかまり立ちをし始めたばかりであり、自己から能動的にはたらきかけることは限られている。また、上述の例にしても、まだ言葉が入ってきていない。そうだとすると、生まれてから9か月目までの時期は、泣くことですべての感情を表す段階から、表面には出にくい聞くこと・見ることが単発的に、相乗的に積み重ねられて発達の足場を用意し、手足・体を動かすこと、笑うこと、声を出すこと、そして舌・唇を動かして口形練習をする段階に進む。他方声を出さずに遊ぶことで以後に言語化する基になる経験を蓄積している時期だと言えよう。

The development and the aim of language life of 0 years old period for the student who are engaged in preschool education -based on “The realities of an infant language life” I (Junya NODHI)-

Shinsho MAEDA

Advanced course of child care and education at Kyushu Women’s Junior College
1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

abstract

The purpose of this study is to explain the development and the aim of language life of 0 years old period for the student who are engaged in preschool education. on that occasion, I find on [The realities of the infant language life] I (Junya Nodhi).

to this book, talks scene and the life of one infant are taken out as much as possible. in a 0 years old child, I pay its attention to practicing crying, looking, moving hands and feet and body, laughing, pronouncing for speaking. as a result, next became clear.

after a baby was born, the time until the ninth month, an infant follows the five phases.

①Stage to express all feelings by crying→ ②Stage to be continued what the infant hears, looks, and to prepare for footing of the development of afterward,→③Stage when an infant moves hands and feet, body and at last comes to give a voice.→④

Stage that an infant moves a tongue, lips and does a pronunciation exercise.→⑤On the other hand, an infant is not raising a voice, and accumulates experiences.